

ニューダンガンロンパ V3 本当の真実

フィル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ニューダンガンロンパV3を発売日から遅れながらも購入し、クリアした結果……暗黒面に堕ちてしまいました。

怒りと憎しみで覚醒した結果、クリア直後に自分で予想していたラストと考察とこれまでの設定を合体させ二次創作を書き始め創りました。

即席で書いたので文章力とストーリーは察してください。

6章のネタバレがあるので、まだクリアしていない方は絶対見ないでください。

ifルートが嫌いな方も見ないほうが良いです。

既に完結させています。15話を予定し毎日6時に投稿する予定です。

基本的には1000文字の短編集です。
では御覧ください。

目次

1 話	希望への歩み	1
2 話	真実の求道者	6
3 話	崩壊	10
4 話	黒幕	13
5 話	大?憑き	17
6 話	特に意味のない黒幕の独白	22
7 話	絶望	26
8 話	絶望の少女	30
9 話	希望の少女	37
10 話	ある調査報告書	53
11 話	ある調査報告書 男子	56

1 2 話	ある調査報告書 男子	2
1 3 話	ある調査報告書 女子	65
1 4 話	ある調査報告書 女子	70
1 5 話	希望の光	79
1 6 話	希望への歩み	86

1話 希望への歩み

全てが嘘……全てが無意味。

今までやってきたことも、今まで背負ってきたことも……今までの想いも……

絶望……

真っ黒な？

だつたら、いくら謎を解いても意味がない。

どうせその謎も用意されたフィクションでしかないんだ。

もう終わりだ。

どうせ……嘘なんだ。

いくらやっただつて意味がない。

これで終わりだ。

……。

「これでいいのか？」

え？

「これでいいのかって聞いてんだよ。終」

百田——くん。

目の前には彼がいた。

「今回の議論がどうした。そんなの関係ねえ」

もういなくなっているはずの百田君はいつのも調子で言った。

「俺はお前を信じている。だからお前はお前を信じろ」

……信じる？

無理だよ。もう……こんな残酷な真実に立ち向かうなんて、もう僕には——。

「理由も根拠も関係ねーよ。誰が何と言おうと、どんな手掛かりがあろうと……最終的に

はお前自身がどう思うかだろ！」

「お前^終」が信じられるかどうか！ 「お前^終」が信じたいかどうか！ 大事なものはそれだけだろっ！」

信じたい…か。

論理で考えるべき場で、その論理よりも気持ち優先させるなんて…いくらなんでもメチャクチャだよな。——— だけど、僕はそんなメチャクチャさに救われたんだよな…。

百田君は言った。僕を信じる理由は「僕を信じているから、それ以外に理由はいらない」と。

ああ、僕が赤松さんを信じた理由と同じだ。

推理を重ねたから信じられることもあれば、信じたいから推理を重ねることもあるのかもしれない。

それでいいのかもしれない。だったら僕は——— 僕を信じる。

「最原くん」

——— 赤松さん。

百田君がぼやけて消えると同時に赤松さんが現れた。

「私は言ったよね。せめて【私の想い】だけは……君に託すよ、って」
赤松さんは微笑む。

「真実を知るのが怖い気持ちって……誰にでもあると思う。

でも、真実を見つけた人だけが、その先の運命を選ぶことが出来るんだよ。

何が嘘で何が真実かわからないままだと、何かを選ぶことが出来ないし……きつと、自分が選んだことすらわからないままだと思う。

だから、怖くても戦わないと駄目だよ、真実と。

君はそれができる人なんだからさ」

僕の頬に優しい熱が伝う。

「だから、もっと自分に胸を張ってよ。私は君を信じているからさ、君も自分を信じてあげてよ」

うん。やってみるよ

僕は僕を信じる。もう目を逸らさない。僕は皆のために……真実に立ち向かう。

君と……僕の約束だよ。

「うん、約束だよ。後は任せたからね……最原くん。……もう少しだけ頑張って」
うん。頑張るよ。

「僕は信じない」

「……………はい？」

「白銀さんの言っていることを僕は信じない」

「信じないって、なんで？ 私たちは嘘の存在なんだよ？ コロシアイゲームを見たい

人たちのために頑張っているんだよ。それをなんで？」

「僕は絶望に屈しない。君がなんて言おうと前を向いて、希望を歩き続ける」

「……………？」

「僕は皆のために——真実に立ち向かう！」

2話 真実の求道者

「何を言っているのかわからないよ？ 最原くん」

白銀さんは呆れたように言った。

「僕は疑問だったんだ。白銀さんは確かに首謀者だと思う。だけど……これまでの白銀さんが全部演技だとは思えないんだ」

「はい？」

「え？」

「何を言っておるんじゃない？」

「そうですね。最原くん」

「全く、何を言っているんですか貴方は」（カムクライズル）

「白銀さん、ちゃんと自分で聞いて、自分の言葉で話して」

白銀はやや疑問に思いながらもコスプレするのをやめた。

「疑問って何が本当は私は優しい人だと思っっているの？」

「確かに君は首謀者だと思う。けれど少しだけ疑問に思うんだ」

「何が？」

「白銀さん。君はフィクションの存在しかコスプレできないんだよね？」

「そうですよ」（舞園 さやか）

「そうね」（霧切 響子）

「そうですね」（セレスティア・ルーデンベルク）

その言葉——切ってみせる！

「白銀さんが言っていることが真実だと一つの疑問があるんだ」

「一つの疑問って何？ 最原？」

「春川さん。それはね——白銀さん、君は僕たちのことを、希望ヶ峰学園の事を、ダンガンロンパのことを嘘の：フィクションの存在と言ったよね？」

「そうだね。それが何？」

「じゃあ、何故、赤松さんのコスプレをして赤いぶつぶつができたの？」

「——ッ？」

「そういえばそうじゃの？ さっきからフィクションフィクションって言っていたのに、なんで赤松のコスプレはできたのじゃ？」

「それはね。赤松さんは生きていたからだよ」

「それは嘘だね。というより、信じない」

「信じない？」

「みんな、聞いてくれ。僕は探偵としての自分をやめる」

「やめる？」

「何を言っておるんじやお主？」

「そうですよ。最原くん」

「いや、今はこれが正しい。記憶を操り、何が真実で何が偽りかが判断できない以上、自分が正しいと思える真実を信じればいい」

「何言ってるんだこいつ？」（桑田 怜恩）

「みんな——僕の事だけを信じて、僕の言葉に納得出来たら、僕を信じてくれ！」

「——最原」

「最原あ」

「最原くん」

みんなが僕を信じてくれ。

「白銀さん、僕たちのことをフィクションと言っている君に赤松さんにコスプレして、ぶつぶつができた理由がわからない、君こそ記憶を上書きされた人間じゃないのか？」

「記憶を上書きして、そんなわけないじゃん」

「いや、あり得る。君は言ったね。プラシーボ効果、暗示、催眠、それを君自身が首謀者だと思っ込んでいるんじゃないか？ 黒幕は別にいるんじゃないか？」

「黒幕って——」

「白銀さんが本当にぶつぶつができるのか、本当は実在する存在にコスプレできるのか、そんなことの真偽はどうでもいい。けれど、君が言っていたことは矛盾している。本当は自分でもわからないんじゃない？ 記憶を弄られて」

「……………」

「最原——黒幕って」

「それは断定できない。けれど、怪しい人がいる」

「「怪しい？」」

そう、一人だけ、みんなとは違う死に方をしている。あまりにも突発で、殺した方も殺された方も、他のロシアアイとは違う事件。

根拠はない、ただもしかしたらという可能性の問題。けれど、あの人なら黒幕の可能性がある。

3話 崩壊

「入間美兔さんだ」

「入間が!？」

「入間じゃとう!？」

「入間さん!？」

春川、夢野、キーボが驚く。

「根拠はない。けれども彼女の才能と死に方は怪しいんだ」

「え、何がおかしいの?」

「彼女の才能だよ。彼女の才能ならモノクマやエグイサルを作り出すことができる。それに死に方自体、殺す直前彼女の姿、現実の姿を誰も見ていない」

「ちよつと、それって——」

「最後にログインしたのは彼女、つまりは何かをする時間があつたんだ。僕たちにとってログイン時の時間差はなかったけれど、彼女は機械の天才だ。現実との大きな時間差を意図的に作り出したり、自分がログインするまで始まらないという設定を作り出していたのかもしれない。それを作り出せる可能性はある。その間に偽の死体を持ってく

4話 黒幕

崩れ落ちる白銀さんを哀れに思いながらも、モノクマの方に目を向けた。

「どうなんだ。モノクマ？」

「……………」

「どうなんだって聞いているんだよ！ モノクマ！」

「う——うぶぶぶぶぶぶ……ぶひゃーひゃひゃひゃつひゃひゃひゃー！」

哄笑、嘲笑、侮蔑、侮辱……そういった感情が僕たちに向けられた。

そして——

「ひゃーひゃひゃつひゃつひゃつひゃつひゃー！」

聞いたことのある。いや、いつも聞いていたあの笑い声！

「ひゃーひゃひゃつひゃつひゃつひゃつひゃー！ お前ら雑魚共がよく真実に気づいたな！」

「入間——美兔！」

「入間ツ……！」

「い、入間！」

「入間さん!？」

「あ、あれ、入間さん、黒幕？ あれ——」

入間美兔が正体を現した。

「俺様が黒幕だよバー——カ！」

「入間さん——」

「いやあ、大変だったぜ、お前らを操りながらコロシアイゲームをやらせるのよおなあ——」

「……………」

「王馬の野郎はなかなか頑張っていたようだがな、自殺して混乱させるとか頭おかしいだろう。あいつ！ あ、赤松が天海を殺した時さ、俺様わざとフラッシュ機能を外せたのに外さなかったんだぜ！ 赤松は人を殺そうとして失敗して、白銀に罪を擦り付けられるとか哀れだよな！ おっと、白銀は記憶ライトを弄って首謀者に仕立て上げたのさ！ どうだ絶望的だろう！ 竜馬は元々無気力だったがあそこまで無気力だったとはね。笑えるううううううう！ まさか、東条にわざと殺されるなんてよ！ 真宮寺はイカ

れてたから殺るだろうとは考えていたけど最中に殺すとかマジ壊れてんだろ！ アン
 ジー、茶柱——哀れ W
 W
 ちよろつと騙してやればゴン太を使つて俺様を殺す計画を立てちゃうとか W W W W W
 W
 W
 そういや、あれね、俺様の死体ね——あれは仮死状態！ お前らが裁判していると
 きに生き返った！ ひゃーひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！ 騙されてやんの！ 次に
 死んだ王馬と百田 W
 W
 かつたけど結局死んでるから人生の敗北者だし、それともあれか？ ゲームの欠陥をつ
 けばコロシアイゲームを終わらせれるとでも考えたのか？ 何善人アピールしてんの
 ？ ——百田は途中で死んだからうざいなあ……—— W
 W
 W
 W
 どうだこれが真実だ！」

「入間——お前ッ」

春川が怒気を強め、王馬の時以上に殺意を向けた。夢野とキーボは最早入間の狂人ぶ

「……………」

僕は押し黙ってしまふ。そう、僕が推理し、想像した真実は——あまりにも悍ましいものだったから——。

「そうだけ最原！ 俺様が黒幕じゃなかったら誰なんだ？」
僕は想い出す。

真実を知るのが怖い気持ちって……誰にでもあると思う。

でも、真実を見つけた人だけが、その先の運命を選ぶことが出来るんだよ。

何が嘘で何が真実かわからないままだと、何かを選ぶことが出来ないし……きつと、自分が選んだことすらわからないままだと思う。

だから、怖くても戦わないと駄目だよ、真実と。

君はそれができる人なんだからさ。

そう、どれだけ残酷な真実だろうと僕にはみんなに伝える義務がある。赤松さんの約束がある。

「おい！ シコ原！ 聞いてんのか！ 俺が黒幕だっつてんだろ！」

「それは違うぞ！」

「ひ——なんだよお、急に大声出すなよお……」

僕の一喝に先ほどの狂気じみたモノが薄れた。

その言葉——切ってみせる！

「みんな聞いてくれ。僕は確かに入間さんを黒幕って言った。けれど、普段の入間さんを見ていて黒幕だと思う？」

みんなに問いかけるが、みんなは半信半疑のように、もしかしたら違うと考えるそぶりを見せる。

「そう、入間さんも記憶を弄られているんだ」

「おい、何を勝手に——」

「黙れ！」

「はいいい！——」

恍惚の笑みを浮かべながら入間は黙った。

「僕は一つの疑問なんだ。入間さんが黒幕だとしても不思議はない。彼女の普段の言動からして犯罪行為はするだろう。けれど、一つの疑問がある」

「最原……疑問って？」

「入間さんが観客ではなく、実際に僕たちと混じると想う？」

「——あ——」

そう、全ての人間を見下している入間さんが観客に見られる行為自体を良しとするわ

けない。

「だから、入間さんが黒幕だとしても記憶や感情を操作されている黒幕で、本当の黒幕は別にいる」

「あれえ、なんだよ……頭痛いよお、なんだよお……！ ふえ？ 心が……ぐちやぐちやに……なんなのお……許してよお……誰か助けてよお」

入間さんが崩れ落ちる。

記憶が混濁し、自分の記憶を信じられなくなっている。

「く……黒幕はいつたい誰なんですか!? 最原くん」

キーボが叫ぶ。

「——黒幕はここにいる」

「誰じゃ！ 誰なんじゃ!?!」

夢野さんが泣く。

「黒幕は——誰?!」

春川さんは言った。

僕はみんなのために本当の真実に立ち向かわなければならぬ。

「本当の黒幕は——キミだ!」

僕は——指をさした。

6話 特に意味のない黒幕の独白

あ、最初に自己紹介をしておきますね。

ボクは【まこと】って言います。

これといって特徴のない、どこにでもいる普通の高校生……。

このつまらなそうな顔をしているのか、ボクなんですけど……。ほら、見た目も普通でしよう？

そんな超高校級に普通なボクが無理をしてエリート校に入ったのが不運の始まりでした。

周りのみんなはエリートで揃いで授業はもちろん会話にもついていけなくて、

ボクは空気の存在です。

親がうざいし。正直うんざりです。

7話 絶望

「黒幕は——お前だろう。モノクマ」

「え、ボク? どうして?」

僕の言葉にすべての視線がモノクマに集まった。

「うぷぷぷぷ。いくら黒幕がわからないからってボクを指名しても意味ないよ?」

「いや、犯人を指名することはできない。——多すぎるんだ」

「多すぎるって——最原! もしかして」

「ああ、黒幕は視聴者……もつと言うには関係者だ」

「関係者じゃと?」

夢野が最原に言った。

「この世界は不自然だ」

「不自然ってなんですか？」

「死体の痕跡が完全に消えること、記憶が弄られる環境、そして——虫がいないこと」
「……………」

「虫がいないことは不自然すぎる。どれだけ地球の環境が壊れようと、どれだけ人の手を尽くしても——虫一匹もないのはありえない。ましてや、草むらがあるんだ。虫がいないことは不自然だ」

「……………」

「この世界は絶望の残党を更生させた新世界プログラムと同じ世界なんじゃないか？」
「……………」

モノクマは黙ったまま、しかし、春川が言った。

「つまりここは電子世界ってこと」

「うん。そうだよ」

「ということは、現実世界ではみんな生きているということか!？」

「……………うん」

僕は少し間をあけて肯定した。

「もう一つ、電子世界の可能性を示すことがある」

僕はさらにモノクマに追い打ちをかける。

「アンジーさんが蘇りの儀式をしたとき——お前は絶対に確実に人を甦らせる——
—と言ったな？ つまりはここが電子情報だからじゃないのか？」

「……ザナドゥー！」

モノクマはたじろいた。

「なるほど……そういうことでしたか。さあ、モノクマ、真実を解き明かしました。僕たちを開放してください」

「そうじゃぞ。解放しろ！」

キーボと夢野は希望に満ち溢れた。

けれども、僕は——絶望した。

この世界に希望がないことを——理解した。

「モノクマ——僕たちは…何回目だ？」

僕はモノクマに問いかけた。

「何を言っているんですか？ 最原くん」

「少し静かにしてくれ。キーボくん。……モノクマ——答えろ」

「……53回目だよ」

8話 絶望の少女

モノクマが笑い。僕は涙した。

みんなは状況についていけずにいた。

「最原……どういうこと？」

春川の質問に最原は答えた。

「そもそも僕たちは自分の意思でロシアアイゲームに参加したと白銀さんは言ったけど、それはおかしいんだ。いくらロシアアイゲームが娯楽になっていても実際に人の記

憶を操作して殺し合わせ、視聴者が見るなんて国が許すわけがないし、いくら何でも実際に参加したいと僕たちが思うわけがない。だって死ぬんだよ?」

僕の疑問に皆はうなずいた。

「春川さん。新世界プログラムは絶望の残党を更生させるシステムだったよね?」

「……ええ」

「そしてこの世界も新世界プログラムと同じ、もしくは似た世界だ」

「……」

「じゃあ、なんで視聴者なんて存在するんだ?」

「それは……」

春川さんが言い淀む。僕は構わずに続ける。

「僕たちはなんでここにいるんだ?」

僕の問いに誰も答える人はいない。

だから、僕は答えた。

「僕たちは——刑罰を受けているんじゃないか？」

みんなは目を見開いた。

「刑……罰？」

「そうだよ。春川さん」

僕は俯きながら言った。

「僕たちは大なり小なり、罪を犯しているのかもしれない。僕たちは絶望の残党で、希望から刑罰を受けている——かもしれない」

「なんですって？」

「なんじゃどう!？」

全員が驚愕する。

「全員がどういった経緯なのかわからない。けれども、心当たりがある人はいる」

「——ッ」

そう言つて僕は春川さんと入間さんを見た。

「入間さんは人に恨まれそうな性格をしている。真宮寺くんは人を殺していた。そして

春川さん……君は——」

「——超高校級の殺し屋」

春川さんを爪を噛んだ。

「……そう、僕たちは絶望の残党で、希望側から刑罰を受けている。そうじゃなければ視聴者がいるわけがない。どうなんだモノクマ……答えろ！」

僕は強く叫んだ。

「僕たちは53回も同じコロシアイゲームをして、終わるたびに生き返らせては記憶を操作しているんじゃないか！ 答えろ」

「……」

少しの間があった。

「う。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。」

モノクマは笑い出し、

「はーはっはっはっはっはっは」

景色が歪んだ。

絶望が現れた。

目の前に——江ノ島盾子がいた。

「まさか真実にたどり着く勇者がいるなんて…考えもしなかったわ」

「——江ノ島——盾子ッ！」

「そんな——死んだはず」

「ん？ 死んでいるわよ？」

江ノ島は事もなげに言った。

「現実には存在していた私も、絶望の残党を絶望させようとした私もいない。私はそのコピーね」

「コピー？」

「そう。貴方たち絶望の残党を罰するためだけの存在、そういうプログラム」

「なッ!？」

「まあ、私的には絶望させれば誰でもいいって感じだし、結局のところ貴方たちが二人に

なったら復活させて記憶消して54回目のコロシアイゲームするつもりだし」

「私たちがコロシアイゲームをずっと思っているの？」

春川さんが殺気を籠める。

「別に、強制的にやめることは可能だし、私的にはもう54回目に移行してもいいんだあ」

「——ッ」

春川さんが悔しそうにする。

「いやあ、まさか真実にたどり着くとはね」

江ノ島は呟いた。

「春川はクロとして死ぬことが多いんだよね。そして最原とキーボは最初に殺されやすいんだ。最原は探偵だからさっさと殺した方が良くと判断されやすいし、キーボは罪悪感がでにくいから殺される。夢野も途中で死にやすいんだよね。だいたい最後に生き残りやすいのって獄原と百田、天海、茶柱なんだよね。特に最原が最後まで生き残ったのは今回が初めてだよ。頑張ったね。偉い偉い」

江ノ島は笑顔で言った。

僕たちは絶望するほかなかった。

たどり着いた真実。それはとても残酷で、知らない方が良かった真実。

こんな真実に立ち向かえるわけないよ……赤松さん。

「じゃ、今回はここまでというところで54回目に行きましようか！」

江ノ島は元氣よく片手をあげた。

ああ、もう一度——始まってしまうのか。

——大丈夫。

9話 希望の少女

——大丈夫。

声が聞こえた。

とても優しい声。

とても綺麗な声。

とても——懐かしい声。

「——赤……松……さん？」

——光あれ。

光の柱が立ち上り、輝く。

僕——最原終一の視界が光に包まれた。目を開けていられないほどの輝きは一瞬だった。次に目を開けた瞬間——彼女がいた。

「赤松——楓ッ！」

江ノ島盾子が叫んだ。

そう——僕たちの目には赤松楓さんがいた。

「みんな、もう大丈夫だよ」

そう言つて彼女はタブレットを操作した。すると江ノ島以外の皆に押しボタンが手元に現れた。

「赤松さん!!? なんで——ここに?」

僕は困惑しながら尋ねたが赤松さんは答えなかつた。

「事情は後で、今は時間がない。ちよつとズルしてここに来たけど、すぐにでも押さないと帰れなくなる!」

夢野さんが赤松さんの大きな声に反応して反射的にボタンを押そうとしたが江ノ島がお道化するように言つた。

「あれ? いいの? 実はその赤松は私が操作して生き返らせたモノでそのボタンはコロシアイゲームリセットボタンだよ」

「——ひッ!」

夢野さんはボタンを落とした。しかし、赤松さんは叫んだ!

「それは違うよ!」

ダンガンロンパ!

「江ノ島盾子——いや……江ノ島盾子の残滓! もう貴方の想い通りにはならない

「！」

希望の弾丸！

「理由も理屈も根拠も関係ない。誰が何と言おうと、どんな虚言を吐こうと……最終的には私たちが自身がどう思うか！」

希望の刃！

「貴方^私たちが信じられるかどうか！ 貴方^私たちが信じたいかどうか！ 大事な

のはそれだけだよっ！」

希望の言霊。

「私は皆の心に響かせる！ 確実に江ノ島の残滓は追い詰められている。だから皆——私を信じてボタンを押して！」

赤松さんの言葉に夢野さんはすぐにボタンを押した。すると光に包まれてここから消えた。

「夢野さん!？」

「大丈夫。現実の世界に戻っただけだから」

赤松さんは優しく言った。

夢野さんの光景を見て人間さん、白銀さん、キーボもボタンを押し、光に包まれ消えた。

そして春川さんもボタンを押そうとしたときに、

「おい、春川！ おめーは自分が出ていいと思うのか？」

江ノ島の発言に春川さんが動きを止める。

「超高校級の殺し屋のくせに罰を受けないってか？ はあ？ 都合が良すぎんだよバカ！ お前はここで一生殺し合いの刑罰を受けなきゃなんねーんだよ！」

「——う……あ」

「く、江ノ島！」

江ノ島が春川さんを惑わせる。しかし、

「春川さん！ 迷っちゃダメ！」

——赤松さん!?

「もしも、春川が『超高校級の殺し屋……だった』としても幸せになっていいんだよ！ だから迷わずにボタンを押して！」

赤松さんが春川さんの背中を押した。

「ぐ——あ h f d s g s f y h d s u g u s k f g u f s k a h f u 四 d f 非 d h f
u g v h f g s y f g u d s f h u k d s 府 g v f u s u v h u d s h ヴ s g u v
b g f b c s h ぢ青 f 儒 s h づぎふ f v d g ふ f v j おウいお s f ふ v ふふ h すい h

「そうじゃぞ。希望は絶望に負けるわけにはいかない！」
老人は嗤う。

「絶望が希望に戻るなんて……ツマラナイ」

絶望
希望が呟く。

それでも——

「私たちは絶望なんかには負けない！」

赤松さんは絶望を打ち砕く。

江ノ島ⅡモノクマⅡ苗木誠Ⅱ日向創Ⅱ老人Ⅱ希望絶望はなお、諦めなかった。目の前の存在は絶望の言霊を叫び続ける。

それでも、僕と赤松さんは絶望を論破する。

「こんなの私の好きなコロシアイゲームじゃないよ！」

「こっちはずっと応援してきたんだよ！」

「今まで値貢獻してきたと思ってるの!?!」

「バッドエンドにしないと運営燃やす！」

「今回のコロシアイは荒れてんな！」

「こういう超展開は好きじゃないんだよ！」

「フィクションが世界を変えられるわけねーし！」

ダンガンロンパ！

「フィクションだって変えられるモノはあるんだ！」

「説教なんて聞きたくないんだけど！」

「そんなことより暗殺者ちゃんの処刑は!？」

「説教臭い奴とかうざいよね!？」

「あーあ、探偵押しだったのになー！」

「こいつらが天海の代わりに死ねばよかったよ！」

「死ぬからキャラが立つんだろう！」

「キャラが死ぬのがコロシアイゲームだろう!？」

「殺し合いは最高のエンターテイメントだよ！」

希望の言霊！

「!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!!」

「後味悪い結末なんて嫌だからね!」

「絶望がおしおきや刑罰を受けないなんて最悪なオチだ!」

希望の刃!

「絶望じゃない、帰るんだ! 刑罰じゃない……:僕らは元の世界に帰るんだ!」

「本当にコロシアイゲームが終わるの!」

「今さら勝手に終わらせないでよ!」

「フィクションのキャラが死んで何が悪いの!」

「いいから殺しあえよ!」

「希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!!」

「だ!! 絶望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!!」

「絶望だ!! 希望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!!」

「だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!!」

「絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!!」

「だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!!」

絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!!

望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!!

希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!!

望だ!! 絶望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!!

絶望だ!! 希望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希

望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 希望だ

!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶

望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 希望だ!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶

!! 絶望だ!! 希望だ!! 絶望だ!!

「もつと殺し合いを見させてよ!」

「カタルシスを味わいたいんだよ!」

「まだまだ次回作に期待していいよな!」

「どうせ終わりっこないよね!」

「こつちはずっと応援してきたんだよ!」

「今までどれだけ貢献してきたと思ってるの!」

「死ぬからキャラが立つんだろう!」

「後味悪い結末なんて嫌だからね!」

「こんなの私の好きなコロシアイゲームじゃないよ！」

「希望か絶望か選びなよ！」

「本当にコロシアイゲームが終わるの!？」

「今さら勝手に終わらせないでよ！」

「フィクションのキャラが死んで何が悪いの!？」

「コロシアイゲームは終わらないよね!？」

「これで最後の終わりだ！」

「希望は前へ進む！ みんなの手でコロシアイゲーム——終わらせるんだ!」

「ぐ——あ h f d s g s f y h d s u g u s k f g u f s k a h f u 四 d f 非 d h f
u g v h f g s y f g u d s f h u k d s 府 g v f u s u v h u d s h ヲ s g u v
b g f b c s h ち青 f 儒 s h づぎ f v d g f v j お ヲ い お s f f v f ふうすい h
ヴい s h f ヲい お あ ふ し h ヲい h い う さ ひ し ど え う 8 い え ふ い e j d f j ん k な f j
d a o s a o p」

僕たちは——ボタンを押した。

光
あ
れ。

——声が聞こえた。

ありがとう。最原くん。君がいてよかった。

最原くんがいなかったら私は震えていたと思う。震えて…何もできなかったと思う。私、最原くんがいてくれてよかったよ。君がいてくれたから、こうして立ち向かえたんだもん。

だから、戻っても、自分に胸を張ってよ。

私は君を信じているからさ、君も自分を信じてあげてよ。

うん。わかったよ。ありがとう——赤松さん。

僕は僕を信じる。

君と…僕の約束だよ。

うん、約束だよ。また会おうね……最原くん。……さようなら。

「ふふふ あーあ、こりや絶望だわ、また、絶望に絶望して絶望を絶望しちゃった。あーあ楽しい。二度も、あんな絶望を体験しちゃった以上はさ、もう戻れないのよね。過去の思い出だけを振り返りながら生きるなんて虚しすぎるじゃん。あー、でも……これでもう……本当に……絶望を希望しないで済む。そん——なの——絶、望……的」

G
a
m
e

o
v
e
r
—
?

10話 ある調査報告書

ある調査書。

今回の事件はあらゆる意味で最悪の事件である。

何が最悪かという私たち希望側に属するものが起こした事件であるからだ。人類史上最大最悪の絶望的事件が収束し、世界が安定し平和になった。

しかし、それでも絶望の種は消えることはなかった。

絶望の残党は民衆に隠れ潜み、仲間を増やし、事件を起こした。

未来機関は絶望を見つけては逮捕した。

しかし、絶望の残党以外にも……敵はいた。

絶望でも希望でもない存在。いや、絶望でもあり希望でもある存在。あるいは両方。

そういった存在はいる。

平凡な人間たちがそうだ。

彼らは基本的には善人なのだろう。しかし、残酷でもある。

娯楽として反社会的な小説を見るし、残酷で悲しいゲームもやる。残酷なものを楽しんで遊ぶのだ。故に絶望でもあり希望でもある存在なのだ。

今回の事件はその「絶望でもあり希望でもある存在」と「絶望」と「希望」が混ざり、混濁し、混雑した組織がしでかした事件だ。

そもそもの発端は、人類史上最大最悪の絶望的事件を起こしたのが希望ヶ峰学園と超高校級の生徒たちであるからだ。超高校級の絶望である江ノ島盾子だって元々は超高校級のギャルである。いくら超高校級の希望が世界を復興させたからと言って、人々の恐怖が消え去るわけではない。しかし、世界を復興させた未来機関と超高校級の希望を非難するわけにもいかない。

だから、非難できる対象を選んだ。

絶望に近い存在を選んだ。

「絶望でもあり希望でもある存在」は非難できる存在を探した。

「絶望」はもはや、人の不幸が見たいだけの集団に成り下がり、誰かを不幸にするためなら進んでやる存在になった。

「希望」は自己満足のために絶望を探し、絶望させようとした。

非難される存在は誰でも：何でもよかった。ただ、絶望に近しく、絶望が疑わしければ対象になりえた。

故に「超高校級狩り」が始まり、狩った彼らを罰する私刑が始まった。

そう——今回の事件は私刑なのである。つまりは自己満足のリンチだ。

彼ら超高校級を捕まえ、新世界プログラムを改悪した電子の世界に記憶を操作して放り込み、刑罰と称して永遠とコロシアイゲームをやらせる。それが今回の事件の真相である。さらにアルターエゴとして江ノ島盾子を模したアバターにゲームを管理させることによって、「絶望に絶望を絶望させる」という図式にし、共食いの様相にして、視聴者に罪悪感を減らした。まったくもって悪趣味だ。さらに希望側にとっては「才能を創造する実験」でもあった。

「絶望でもあり希望でもある存在」は視聴者として超高校級を馬鹿にし、愚弄した。

「絶望」は超高校級を絶望させるため、かつての崇めたものを利用し絶望させた。

「希望」は自己満足の正義のために、共食いの形で刑罰を執行した。

そうして、彼ら——絶望といえない彼らが事件に巻き込まれた。

11話 ある調査報告書 男子

ある調査報告書。

【超高校級のロボット】キーボの報告書

・彼が絶望と見做され、事件に巻き込まれた理由は飯田橋博士への傷害事件が原因である。希望のために——希望の後継者として作り出された彼には経歴に汚点はあつてはならない。故に、事件を起こした時点で絶望と認定された。未来機関や希望側に属する者にとってキーボの存在は嫉妬と嫌悪の対象にしかなりえず、絶望と一方的に判断され、超高校級狩りに誘拐されて、新世界プログラムの私刑による刑罰を受けた。

【超高校級の民俗学者】真宮寺是清の報告書

・彼に関しては特に弁明することはない。彼は殺人鬼である。人類史上最大最悪の絶望的事件を隠れ蓑に何人もの女性を殺害した。いち早く彼の存在に気づき、組織は彼を絶望と認定し、超高校級狩りで誘拐し、新世界プログラムの私刑による刑罰を執行した。

【超高校級の総統】王馬小吉の報告書

・彼は愉快的な犯行繰り返す「DICE」という秘密結社の総統であり、10人の手下を従えていた。人を殺さない、笑える犯罪をプロデュースする組織である。その組

織力は未来機関と比肩するほどの力を持っている。しかし、数の差による不利は埋めがたく、組織に誘拐されてしまった。何故、彼が組織に狙われたかという和我々未来機関にも責任があるかもしれない。

人類史上最大最悪の絶望的事件以降、彼らは絶望に対抗するために動いていたのだ。その破壊力は絶大であり次々と絶望の残党を壊滅させた。我々未来機関にも協力し、秘密組織という利点を利用して絶望側のスパイ活動すらしていた。しかし、絶望側にも見えることが不幸の始まりであつた。世間一般には周知されていないが、希望側と絶望側どちらにも彼らを知る者はいた。「希望側」は彼らを絶望側に近い存在と見做し、「絶望側」は今までの恨みから彼らを誘拐した。

組織は彼を絶望と認定し、超高校級狩りで誘拐し、新世界プログラムの私刑による刑罰を執行した。

【超高校級の昆虫博士】 獄原ゴン太の報告書

・彼は良い人間である。しかし、あまりにも体格が良く、頭が良くないのは確かである。正確に言うならば、人を信じ過ぎるのだ。それは美点であるが人類史上最大最悪の絶望的事件では不利につながる。社会の大多数が人を疑うようになった時代では彼は眩すぎる存在であり、人々は彼を排他ないし利用し続けた。それにより何度か人を傷つけたこともある。見た目も怖いということにより組織は彼を絶望と認定し、超高校級狩りで誘拐し、新世界プログラムの私刑による刑罰を執行した。

12話 ある調査報告書 男子 2

ある調査報告書。

【超高校級の冒険家】天海蘭太郎の報告書

・彼は万能の天才であると言えるだろう。多芸にして多彩だ。しかし、全てが冒険家として必要な技術であり、経験した知識だ。人類史上最大最悪の絶望的事件が起きてから彼の必要性は高まった。未開となった国の調査を仕事にし未来機関の協力者となったのだ。その結果、希望側に嫉妬され、希望でも絶望でもない一般人には御曹司ということもあり嫉妬の対象となった。彼は一方的な嫉妬により事件に巻き込まれた。組織は彼を絶望と認定し、超高校級狩りで誘拐し、新世界プログラムの私刑による刑罰を執行した。

【超高校級のテニス選手】星竜馬の報告書

・彼は善人であっても罪人である。いくら理由があろうと実際に人を殺してしまった事実がある以上、希望側である未来機関は彼を許すわけにはいかない。しかし、彼はもう刑期を終えた……終えていたのだ。裁かれ、刑に服した以上、誰も彼を罰する権利はない。しかし、組織は一方的に彼を処罰した。組織は彼を絶望と認定し、超高校級狩りで誘拐し、新世界プログラムの私刑による刑罰を執行した。

【超高校級の宇宙飛行士】百田解斗の報告書

・彼は人類史上最大最悪の絶望の事件を解決するために尽力した。地上が絶望に犯された時に世界各国は空を……宇宙空間を通行手段として利用した。数少ない高度な技術者として彼は希望に貢献した。人類史上最大最悪の絶望の事件が収束し、彼も元通り宇宙飛行士として活動した。しかし、「希望」と「絶望」「希望と絶望」の組織、「絶望でもあり希望でもある存在」と「絶望」と「希望」が混ざり、混濁し、混雑した組織がしでかしたのだ。組織は彼の欠点である書類の偽造による経歴詐称を理由に組織は彼を絶望と認定し、超高校級狩りで誘拐し、新世界プログラムの私刑による刑罰を執行した。

【超高校級の探偵】最原終一の報告書

・彼は酷い例の一つだろう。数少ない理不尽による刑罰だ。彼は人類史上最大最悪の

絶望的事件を解決するために尽力した。とはいえ、他と比べると大きく尽力はしていない。荒廃した世界の中で民間による小さな事件を解決し続けた。しかし、この時代において正しいことをすることは必ずしも幸せになることにはならない。彼は恨まれたのだ。理不尽な逆恨みをだ。「絶望でもあり希望でもある存在」と「絶望」は罪の重さ軽さ関係なく、探偵によつて暴かれたことを逆恨みした。逆恨みにより組織は彼を絶望と認定し、超高校級狩りで誘拐し、新世界プログラムの私刑による刑罰を執行した。

彼は誘拐され、みんなと一緒に監禁されたとき希望側に軽く洗脳された。彼らは個人差があるとはいえ、希望側に脅され、洗脳された。自らが罪人だと思わされた。最原終一も逆恨みを正当な恨み……冤罪と思わされたのだ。彼は新世界プログラムに刑を執行される直前に呟いたらしい。

「僕はみんなと一緒に死にたいです」——と。

13話 ある調査報告書 女子

【超高校級の発明家】 人間美兔の報告書

・彼女は今回の事件の最悪の加害者にして最大の被害者であるだろう。何故ならば彼らを罰する新世界プログラムを作ったのは彼女だからだ。しかし、忘れてはならない。未来機関にも責任の一端があるのだから。彼女は人類史上最大最悪の絶望的事件を解決するのに一番貢献したのだから、未来機関の多くは絶望の残党を狩ることで解決に導いたが、地球の環境は解決してくれなかった。空気の汚染、水質の汚染、大地の汚染、電子の汚染、その多くは犯され汚されていた。それらを発明した機械で浄化したのが彼女なのだ。彼女は人類史上最大最悪の絶望的事件解決の最大の功労者だともいえる。

しかし、彼女の性格が彼女を不幸にした。そもそも最初は自分だけを助けるために人類史上最大最悪の絶望的事件直後は自分用の浄化機械しか作らなかった。その時点で人格を未来機関に疑われていた。彼女を擁護するならば、事件直後の時点で大きな施設及び、多くの機材を所持していなかったので自分用しか作れなかったのだ。実際に施設

と機材を用意されたら嬉々として浄化システムを発明した。その際私たちを見下す発言はしていたが、一度も「作らない」「やめる」などの言葉は言わなかった。

人類史上最大最悪の絶望的事件が収束したあと、未来機関は彼女の性格を嫌い、彼女を放り出した。これが今回の事件の元凶だろう。彼女は民間で悠悠自適に過ごしていたが、時代にそぐわない生活をしていることから嫉妬され恨まれた。さらにあの性格では嫌われるだろう。彼女はすぐに誘拐された。しかも、今回の事件の数か月前に……被害者の皆よりも早く誘拐されたのだ。彼女は脅されて仕方なく新世界プログラムを作り出した。さらに毎日罵詈雑言を浴びせられたらしい。今回の多くの必要なものは彼女が作り出した。彼女の発明とはいえ、彼女の境遇は一方的に非難は出来ない。

彼女は自分の作った新世界プログラムを自分で刑罰として受けたのだ。さらにこの新世界プログラムを司るAIは「江ノ島盾子のアルターエゴ」を模したアルターエゴである。これは希望側が求めた絶望同士の共喰いをするための構想である。

彼女は絶望と一方的に判断され、超高校級狩りに誘拐されて、新世界プログラムの私刑による刑罰を受けた。

【超高校級の美術部】夜長アンジীর報告書

・はつきり言つて彼女はよく分からない。希望とも絶望とも判断付かないのが彼女である。人類史上最大最悪の絶望的事件が始まり、収束するまでの途中で一つの地域だけ平和に安全に暮らしていた。多くの人々は理想の地としてそこへ向かった。未来機関も協力的な地域として深くは考えなかった。人類史上最大最悪の絶望的事件が収束したあと未来機関がその地に訪れると異様な光景を見たらしい。

【夜長アンジীরを教祖とした宗教団体の地】———そのように見えたらしい。彼女は決して犯罪行為をしなかった。しかし、端から見れば確かに異様だったらしい。彼女が言う神様に言葉に一喜一憂する人々は異様だった。しかし、それでもその地域は秩序があり、平和だったのは確かだ。

彼女や人々は犯罪行為や絶望の行為をしなかったが未来機関は夜長アンジীরを絶望として捕まえた。結局は決定的な絶望としての行動を見つけられず彼女を解放するになつた未来機関である。しかし、「絶望でもあり希望でもある存在」と「絶望」と「希望」が混ざり、混濁し、混雑した組織は彼女に目を付けた。

彼女は絶望と一方的に判断され、超高校級狩りに誘拐されて、新世界プログラムの刑による刑罰を受けた。

【超高校級のコスプレイヤー】 白銀つむぎの報告書

・彼女は人類史上最大最悪の絶望的事件において大きく活動はしていないが、一所懸命にコスプレイヤーとしての力を使い人々を元気づけた。収束するまで大人から子供まで勇気づけたのだ。しかし、どこにでもいる凶悪なファンはいるのだ。彼女の嫌がることをするカメラマンやストーカー行為をする者も続出した。当然のように彼らは捕まったが逆恨みをされた。今回の事件、クロスアイゲームにおいて彼女はラスボスの設定になることが人間美兎について多かった。やはり超高校級のコスプレイヤーとして江ノ島盾子にもコスプレできるのが要因だろう。

彼女は絶望と一方的に判断され、超高校級狩りに誘拐されて、新世界プログラムの私刑による刑罰を受けた。

【超高校級の合気道家】茶柱転子の報告書

・人類史上最大最悪の絶望的事件において彼女は絶望の残党狩りで大きく貢献した。しかし、同時に彼女は扱いづらいのだ。彼女の信念、思想が異常であり男性を「男死」と称して嫌うのだ。さらにこの時代では冗談にならない絶望認定を男性というだけで絶望認定するのだ。彼女は戦力としては高く強いのだが男性を極度に嫌う性格によって男性側からひどく嫌われるのだ。さらに彼女の活動によって重傷を負う絶望の男死が多かった。その恨みから組織は彼女を絶望と認定し、超高校級狩りで誘拐し、新世界プログラムの私刑による刑罰を執行した。

14話 ある調査報告書 女子 2

〔超高校級の保育士〕 春川魔姫の報告書

・彼女は今回の事件において希望側にとって重要な存在であった。

カムクライズルプロジェクト……その残滓のプロジェクトの実験台が彼女である。カムクライズルを作り出す方法は超禁忌規定により情報は規制され、知ることは不可能であるし、そもそも完全に残っているかも怪しい状態である。しかし、カムクライズルを作り出す過程において生まれた技術は残っていた。カムクライズルは「才能のない人間を完璧な人間」にするための計画である。その過程で才能を植え付ける技術が生まれ、今回の実験において人間は二つの才能を持てるかという趣旨で始まった。カムクライズルのように感情を消して完璧な存在を生み出すのではなく、感情を持ったまま才能を増やすことは難しい。この実験において希望は只の実験として始めた。故に絶望の悪意には無頓着だった。〔超高校級の保育士〕に〔超高校級の殺し屋〕の才能を植え付けるようにしたのは絶望側だった。理由は単純に善である保育士の才能を穢したかったからだ。もちろん、彼女の性格は元々が無愛想であり、少ないながらも殺し屋の性質を持っていると判断されていた。さらに言えば〔超高校級のギャンブラー〕や〔超高校

級の風紀委員」の性質もあると判断されている。しかし、絶望側に殺し屋になるように操作されてしまい、コロシアイゲームにおいて殺し屋を強制された。

何故、彼女が捕まり実験台にされたかというところ【塔和シテイ事件】が原因である。彼女は【塔和シテイ事件】で犯行に携わった子供たちを擁護し、保護した。その結果、大人たちに憎悪を向けられた。子供でも大人でもない彼女は大人たち一身に憎悪を向けられ、絶望側に付け込まれた。

彼女は絶望と一方的に判断され、超高校級狩りに誘拐されて、新世界プログラムの私刑による刑罰を受けた。

【超高校級のマジシャン】夢野秘密子の報告書

・彼女は人類史上最大最悪の絶望的事件において大きく活動はしていないが、一所懸命にマジシャンの才能を使い。人々を楽しませた。しかし、彼女の悪癖が今回の事件に巻き込まれる要素となった。人類史上最大最悪の絶望的事件以降、人々は疑い深くなったり、ふざけたりする人を嫌悪するようになった。彼女は常日頃から自分を魔法使いと言い、マジックを魔法と言い続けた。これを気に障る人たちがいて彼女を嫌悪するようになり、彼女を嘘つき呼ばわりし、絶望扱ひした。

彼女は絶望と一方的に判断され、超高校級狩りに誘拐されて、新世界プログラムの私刑による刑罰を受けた。

【超高校級のメイド】東条斬美の報告書

・彼女は哀れな存在である。彼女は未来機関に最も近い存在である。

彼女は超高校級のメイドとして顧客の総理大臣から「メイドとしてすべての国民に仕えてほしい」と「国の建て直し」すべての権限を譲渡された。表向きは私設秘書だが実質国の総理大臣になった、彼女がメイドとして大切な存在は国民全員だった。国という主人に従える事が最高の仕事だった。しかし、それは暗い陰謀であった。人類史上最大最悪の絶望的事件は突発的に始まったわけではない。ゆっくりと徐々に始まったのだ。当時の総理大臣は人類史上最大最悪の絶望的事件の予兆を察知しており、事件の責任を超高校級のメイドの東条斬美に負わせ、それに乗じて希望ヶ峰学園を乗っ取るうと考えていた。しかし、当時の総理大臣の想像を超える事件になった人類史上最大最悪の絶望的事件によって当時の総理大臣は責任追及どころではなくなった。

彼女の不幸は総理大臣の悪意が元凶だった。もし、これが只の責任転嫁だとしたら彼

女は喜んで責任を被つただらう。しかし、仮初の総理大臣になったことによつて彼女の心は傷を負つた。人類史上最大最悪の絶望的事件によつて仕えるべき国民が死んでいく現実に彼女の心は深く傷ついた。

政府が崩壊したあと彼女は未来機関によつて重用され、希望として大いに活躍した。しかし、彼女はいつまでも後悔し続けた。——〔人類史上最大最悪の絶望的事件を止められなかったことを〕——誰かが止めることは不可能だった。けれども彼女は不能を後悔し続け、自分を責め続けた。

彼女は強かつた。強すぎた。誰も彼女の心の内を知ることにはなく。彼女も自分の弱さを誰にも見せなかつた。致命的に壊れていることに誰も——本人も気づかなかつた。

人類史上最大最悪の絶望的事件が収束したあと、彼女の前に希望と絶望が現れた。

「人類史上最大最悪の絶望的事件の責任とつてくれませんか？」

滅私奉公を常とする彼女、自分を責め続けた彼女にとってその言葉はどんな幸福よりも甘美で——麻薬に等しいものだった。

彼女は責任を取るという形で絶望と一方的に判断され、自分から超高校級狩りに誘拐されて、新世界プログラムの私刑による刑罰を受けた。

【超高校級のピアニスト】赤松楓の報告書

・彼女は人類史上最大最悪の絶望的事件において大きく活動はしていないが、一所懸命にピアニストの才能を使い、人々を楽しませた。音楽とは世界共通の言語でもある。さらに彼女は人類史上最大最悪の絶望的事件のとき海外にいたこともあり、海外で演奏し続けた。彼女は世界的なピアニストに成長するまでに至った。絶望に屈することなく、しぶとく生きながら、未来機関に保護されるまで音楽を奏で続けた。

まさに音楽の世界における「希望の象徴」となった。

故に多くの「絶望でもあり希望でもある存在」に嫉妬され、憎まれた。

だから彼女は——彼女は絶望と一方的に判断され、超高校級狩りに誘拐されて、新世界プログラムの私刑による刑罰を受けた。

15話 希望の光

——知らない……白い天井だった。

僕の名は最原終一。超高校級の探偵だ。

長い……長い夢を見ていた気がする。

けれども——僕が見ていた夢は……もう一つの現実だ。

コロシアイゲーム……とても残酷なゲーム。

顔を横に向けると——赤松さんがいた。

赤松さんは寝たままだった。

「赤松さん」

「なに？ 最原終一くん」

「……………え？」

逆の方向から声がして、顔を向けると……………赤松さんがいた。

「……………え？……………あれ？……………赤松さんが二人!？」

右と左、交互に首を動かし確認する。うん…赤松さんが二人いる。

すると起きている赤松さんは咳払いをした。

「あつちの世界では君と会ったけど、現実での君とは始めてだね。私の名前は赤松楓です」

赤松さんは丁寧にお辞儀をした。僕もつられてお辞儀をした。

「私の妹がお世話になりました。そして……ありがとうございます」

続けて彼女は言った。……妹？

僕は寝ている方の赤松さんを見た。

「最原さんと初めて会ったのはその子——妹の——赤松紅葉。私の大切に大好きな双子の妹です」

起きている彼女——赤松楓さんは言った。

彼女は語り始めた。

僕たちは確かに刑罰を受けていたこと。

だけどそれは公的な機関ではなく、ただの私刑でただの逆恨みだったこと。

僕たちは嘘の存在ではないこと。

「けど、紅葉だけは違った」

楓さんは寂しそうに言った。

「紅葉は私のようにピアノリストの才能を持っていなかった。その道のプロである私が言

うよ。紅葉はピアノをうまく弾ける。だけど私の方が上手い」

楓さんは悲しそうに言った。

「私は紅葉の本当の気持ちを聞きたい。どうして、紅葉は私のフリをしたんだろう」

楓さんはつらそうに言った。

「紅葉は私のフリをして誘拐された。誘拐されても紅葉は私のフリをし続けたんだって

……そして、新世界プログラムの中で紅葉は私になった」

楓さんは……………泣いた。

「私……………紅葉の気持ちかわからない。だから聞きたい。気持ちを知るのは怖い気もするけど……………けれど、聞きたい。聞いて、おかえりって言いたい」

「——楓さん」

楓さんは涙を拭きながら立ち上がる。

「ちよつと、男の子に泣き顔とか見せられないよ。お化粧直ししてくるから紅葉を見ていて」

そう言つて楓さんは病室から廊下へと出た。

廊下から人の声と別の病室の声が聞こえてくる。

「あ、紅葉や皆を助けてくれてありがとうございます。えくと」

「そんな感謝されることはないよ。これが俺の役目だからさ」

「そうだよ。希望の象徴である超高校級を助けるのは僕たちの役目で僕の義務なんだよ」

どこかで聞いた声でした。

「ハーン。マドモアゼル。僕の美味しい病院食……如何かな？」

「ひい！ 男死です！ 消えてください死んでください今すぐに！」

「相変わらずじやのう」

「そうだねえ」

ああ、懐かしい声。

「オメー、すげえな！ これを作ったのか？」

「うっせー雑魚！ 三下が俺様に話しかけんな！」

「——控えおろう！」

「ひい！……なんだよ……大きな声出すなよう」

また、聞きたかった声。

「先生！ 百田は、百田は大丈夫ですか！」

「は、はい。大丈夫です。私の専門ではないですけどこのお薬で百田さんの病気は

治ったはずですよ」

ずっと、会いたかった声。

「東条さん！ 大丈夫ですか！」

「大丈夫です。なえ——」

「いえ、大丈夫なわけがないわ」

「そうだよ！ 東条さん！ この際だから休んじやおうよ！」

「しかし、それではメイドとして——」

「いいからいいから」

「ふ…ふん。メイドだかなんだか知らないけど、これ以上みんなに迷惑かけるつもり！」

「腐川さん相変わらずだね…：…けれどお兄ちゃんの言うとおりですよメイドさん」

——声がする。

もう少し耳を傾ければ、もつと別の声が聞こえるのだろう。

僕は赤松紅葉さんの横顔を見る。

「僕は—— 赤松さんの…：…赤松紅葉さんの声を、また聞きたいな」

僕はちやんと生きて戻ったよ。

約束を果たしたよ。

だから目が覚めたら——友達になろう。

16話 希望への歩み

私の名は赤松紅葉。

どこにでもいる普通の女の子だ。

そしてあまりに眩しい双子の姉、赤松楓の妹である。

姉は超高校級のピアニストであり、その才能は次元を超えていた。

そう、プロに近い私は理解できる。あまりにも隔絶した才能の差だ。

子供が大人に勝てないように———それほどまでに実力差があった。

私は音楽をやめた。

文字通りの意味ではない。友達に頼まれたら弾くし、子供に頼まれてもピアノを弾く

だろう。

ただ、姉と比較されそうなとき、私は絶対に弾かない。
惨めになるから。

自分の才能のなさを、姉に対する嫉妬を、音楽に対する憎しみを、
何より自分が惨めだった。

姉の楓はもう、世界のピアニストになっていた。

絶望に抗った希望は世界に愛された。

ますます、双子の出来損ないとして惨めになった。

希望という名の才能は身近にいる人を絶望させてしまう。

姉と同じ学年の友達に姉の才能を純粹に喜べるだろう。両親も同じだ。

だけど、姉と同じ立場、姉と同じように音楽が好きで嗜んでいる者にとつて姉は絶望の対象である。どうあがいても勝てないという現実は多くの才能の欠片を持つ少年少

女を絶望させた。

多くの少年少女は楓の音楽の才能に絶望し、屈服した。

私もそうだ。

姉は、小さい頃から才能を發揮していた。その時は嫉妬半分だったけれど、その頃にあの「人類史上最大最悪の絶望的事件」が起きた。

姉はその時、海外に居たし、事件が本格化した時にはもう連絡手段がなかった。

「超高校級の希望」である苗木誠が江ノ島盾子を倒した後、ゆつくりと世界は平和へと近づいた。

徐々に連絡手段が復活し、世界中の情報が伝わるようになった時、私は希望に絶望した。

姉はもう、私には届かない存在になっていた。

「超高校級のピアニスト」

その才能は世界に希望を届けていた。

機械の電波越しからでもわかるほどの希望の音。

姉は世界の希望になり、私は姉に絶望した。

私はもう音楽を辞めた。

姉と比較されるのが嫌だ……どころではない。

私のレベルで姉と同じことをしていることが姉に対しての侮辱なのだ。

ああ、私は音楽が好きでなければよかったのに……。

私が姉に絶望して、数年後……。

突然になって私は誘拐された。

最初は驚いた。

けれど理解した。

彼らは私……赤松紅葉を姉である赤松楓と間違えた。

私は薄く笑い、絶望的な状況下で希望した。

もしも、彼らの前で私の才能を発揮し、認められれば……私は「超高校級のピアニスト」

になれるという暗い願望が生まれた。

だから私は言った。

「はい。
私は赤松楓です」

これは私への罰なのだろう。

希望がなにも不自由なく暮らしているなどと考えていたことが傲慢だったのだ。

超高校級の才能を持つ人間は才能を持つだけで、ただの人間なんだ。

彼らは赤松楓を誘拐した理由は才能を持つこと関係なく、ただ絶望させたかっただけなのだ。

赤松楓を含めて超高校級の才能を持つ者を全て。

私は彼ら超高校級と出会い、話し、私は自分勝手な人間なのだと自覚した。

彼らも失敗したり、悲しんだりしていた。

私の姉の赤松楓も世界を相手に絶望したりしたんだろう。

希望だって悲しんだりするんだ。

私だけ辛く悲しいものではないんだ。

私が見ている前でみんなが洗脳されたり、絶望されている。最後に新世界プログラムを受けようとしている。

私は、そもそも本人ではないので他人事のように私への絶望を聞き流した。

でも、これで最後。

このプログラムに入れば、私は設定として赤松楓なる。

お姉ちゃん。ごめんね。

けどよかった。

お姉ちゃんがこんな奴らに捕まらなくて……

私の希望が——穢されなくて——

夢のような曖昧な空間だった。

暖かい、安らぎの時間。

目を開けたら希望がある気がする。

ああ、光の先へ、私は重たい瞼をゆっくりと開いた。

「おかえり——赤松さん」

光
あれ。